Die Eiche ディ アイヘ
http://www.jdg-chiba.com

Japanisch-Deutsche Gesellschaft der Präfektur Chiba
〒270-2214松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456
Mail: info@jdg-chiba.com
協会Home Page

カールステン キーゼヴェッター顧問 ありがとうございました

ー有志送別会行われるー

当協会の顧問を務めておられるカールステン キーゼヴェッター大佐は、新たな任地へ向かうため、日本を離れられます。

４年間、当協会の顧問としてドイツ人軍人慰霊祭へのご参加をはじめ協会の活動にご参加され、会員との人的交流も深まりました。

７月20日、有志でキーゼヴェッター大佐との送別会が実施されました。この間のキーゼヴェッター大佐への感謝、送別会の様子、今後のキーゼヴェッター大佐の業務など皆様にお伝えします。

千葉県日独協会会長のメッセージとなります。

キーゼヴェッター大佐への感謝の言葉

会長 金谷 誠一郎

貴殿は、2019年にライボルト大佐の後任として、着任以来毎年11月のドイツ「国民哀悼の日」に合わせて、当協会主催のドイツ軍人慰霊祭に参列していただき、誠に有難うございました。貴殿が日独の文化交流に尽くしたご貢献に心より感謝申し上げます。

Herzlichen Dank für Ihren großartigen Beitrag zum Kulturaustausch zwischen Deutschland & Japan und eine angenehme gute Heimreise!

Seiichiro Kanaya（Präsident der Japanisch – Deutschen Gesellschaft der Präfektur Chiba）

キーゼヴェッター大佐との交流を通じて

会員 本名 龍児

キーゼヴェッター大佐の任期期間は、新型コロナウィルス感染症拡大の時期と重なり、協会としてもあらゆる行事を中止ないしはオンライン等での実施とせざるを得ない状況でしたが、協会の大切な行事であるドイツ軍人慰霊祭へのご臨席等の機会を通じて、心のこもった交流を具現してくださいました。

ご自身の曾祖父の弟にあたられる方が第一次世界大戦中に捕虜として大分の収容所で亡くなられており、同様にドイツ人捕虜の慰霊を主目的とした当協会の活動への深いご共感がおありのためだったと推察します。

また、この期間は、ドイツがインド太平洋への関心を高めつつある日独関係の重要な時期でもあり、国防省高官、海軍の艦艇、空軍の航空機等の訪日が相次ぐご多忙な期間でしたが、2022年11月、来日された衛生軍総監をドイツ軍人慰霊祭にご案内いただいております。新型コロナウィルス感染症拡大の渦中にあって、約100年前のインフルエンザによる物故者への慰霊を日独関係者の手により継続できたことは、意義深いことでした。

今後は、ドイツに直接帰国ではなくローマのNATO国防大学で教育を受けられ、ドイツはもとより広く欧州全般の安全保障に係る業務に携わられることになりました。

引き続き、日本とドイツとの架け橋としてのご活躍、ご健勝を祈念申し上げます。

Alles Gute und auf Wiedersehen!

常任理事兼事務局長 植松 健

大佐より寄贈された名入りボトルシップ

2023年7月20日（木）18時30分より、キーゼヴェッター大佐の送別会は、秋葉原（船橋駅と広尾駅の中間）にある居酒屋「半蔵」で盛大に開催されました。 出席者は大佐令夫人のゾフィーさんはじめ武官室からはクルザフスキー曹長、協会からは金谷誠一郎会長、桑原純子さん、田中重伸さん、本名龍児さんら含め総勢へ11名。 まずは全員がキンキンに冷えた生ビールで豪快に乾杯し喉を潤した後、金谷会長が（通訳：保坂有里奈さん）千葉県日独協会を代表してこれまでの大佐のドイツ軍人慰霊祭出席はじめ日独文化交流における数々の貢献に敬意と謝意を表明しました。そして過去4年間の写真と会員有志から寄せられたメッセージを散りばめた色紙（本橋常任理事編集）をプレゼントすると、大佐からも協会に対して、大使館特製の風呂敷に包んでご自身の名前が刻まれた美しいボトルシップが贈られました。 今回久しぶりに実現した対面式での「飲み会」は、初めて見た私服姿の大佐や奥様から普段伺うことのないプライベートなお話が多く聞け、終始笑いの絶えない至福のひと時でした。と同時に、ドイツ大使館武官室と千葉県日独協会が一つになった瞬間でもありました。

千葉県誕生150周年記念式典参加報告

常任理事 志賀 久徳

記念式典会場の様子

千葉県誕生150周年記念行事オープニングイベントが6月11日、松戸市の「森のホール２１」などで開催されました。当協会の金谷会長宛に招待状が届き、来賓として当協会関係者が出席しました。記念式典には参加応募当選者を含め約1500人が参加し、冒頭に熊谷知事から「先人の築いた歴史を礎として、共に県の総力を結集して、皆様と新しい千葉の未来を切り開きたい」との挨拶がありました。その後に関係者の挨拶、記念切手デザインコンテストの表彰式、知事と記念事業総合プロデューサーとのトークセッション、千葉交響楽団、他によるコンサート等が盛大に行われました。

式典会場の外では、県に関係の深いアーテストによるパフォーマンスの他、ワークショップ、クイズ、記念切手販売などが行われ、多くの人々でにぎわいました。

今後は、年間を通じて県内各地で様々な記念事業が計画されており、千葉県のHP内において、「千葉県150周年記念事業」にて検索すると詳しく紹介されています。

今回は、知事をはじめ、県の関係者の方々への挨拶の機会にも恵まれ、祝意に加えて、今後の相互間の協力等についての要請も行いました。

千葉県誕生150周年
記念ロゴマーク

2023年度の活動に向けて

竹内理事の抱負

2017年に入会し、理事・若手青壮年部員として活動させていただいております。千葉県日独協会は全国各地の日独協会の中でも特に新会員・若手会員獲得に力を入れていると感じていますが、同時に協会の名をより多くの方に知ってもらう余地はまだ十分にあると考えています。自身も入会するまで東京の日独協会しか存じ上げず、当時初めて千葉県及び全国各地に日独協会が存在することを知りました。県内でドイツやドイツ語、ドイツ文化に関心のある方は実際もっと多いと思われるため、まずは当会の存在を知ってもらうことが重要です。そのためにはドイツ語を学べる県内の高校・大学に活動紹介チラシやイベント告知の発送、関心を持つ方向けのオンライン説明会の開催、若い世代の使用率が高いInstagram・Twitterのアカウント開設・運用などが出来ると考えられます。さらにドイツ語ネイティブとの交流の場を設けたり、県内に留学しているドイツ語圏の学生とつながりを構築したりすることにより、協会の活動がより魅力的になり、入会希望者増加に繋がっていくのではないでしょうか。まず自分に何ができるのかを考えて、協会の発展に少しでも寄与していきたいです。

坂田理事の抱負

2019年、サラリーマン生活を終え、30年数年前に過ごしたドイツおよびヨーロッパの雰囲気に浸りたく、入会。昨年、同協会理事に就任いたしました。昨年度は、慰霊祭や新春講演会の担当者の1人として、業務に携わることができ、貴重な体験をさせていただきました。今年度も多々の行事が控えておりますが、私が唯一得意とする'行動'力を協会運営に役立てていただければ、と考えております。さらに、'（若手）会員数の増大'という協会の命題のために、何か行動ができれば、と考えております。

「ドイツ語入門研究会」を始めて

理事 木戸 芳子

私は、長年ドイツ語教員の仕事をしてきましたが、退職後は、仕事としてではなく（無報酬で）、ドイツ語を学びたいと思っていたがその機会がなかったという人たちと、試験などの強制もなく、先生と生徒という関係でもなく、一緒に楽しみながらドイツ語を学ぶ、クラブ活動のようなことをしたいと思っていました。その願いが、「ドイツ語入門研究会」で実現できたことをたいへんうれしく思っています。

このたびDie Eicheに誌面をいただきましたので、研究会を通して、現職時代とはまた異なる思いがけない楽しい、得難い経験が得られたことを、いくつか思いつくままに記させていただきます。

たとえば、„mehr als Sprache"というフレイズがあります。「言語以上のもの」という訳になるかと思いますが、どんな背景で、誰が、誰に対して、いつ、どこで、どのような状況で言語を使用するかという様々な状況が考えられます。こうした状況を的確に判断することが、話者同士の誤解を避けることにつながるということは、当然と言えばそのとおりかもしれませんが、様々な伝達技術が急速に進む中で、その重要さを痛感させられることがしばしばあります。

こんな笑い話があります。女の子を出産して数ヵ月後のドイツ人Aさんから聞いた話です。Aさんが道端で日本人の知人Bさんと出会った時、Bさんから「赤ちゃんのお名前はなんというの？」と聞かれ、Aさんは「Jutta（ゆった）」と答えました。Bさんは「言（ゆ）ってないよ」と言いうと、Aさんが少々語気を強めて「Jutta (ゆった)よ」。

異なる母語話者たちの、異なる２言語間で酷似した発音から生じた誤解ですが、そんなエピソードを交えながら、私自身が、楽しく愉快にドイツ語を学んでいます。

日本語からドイツ語に翻訳する際の多くの苦労も、研究会で行うと楽しい作業です。「卓袱台（ちゃぶだい）」は、辞書には「和室で用いる、足の短い食卓」とあります。「Esstisch」だけでは、椅子が周りにあるのが前提となるでしょう。何かスマートな独訳ができないか、皆さんと一緒に考えを出し合うのも、私にとっては楽しいひと時です。

その昔、世界各国のドイツ語教員向け研修に参加したことがあります。そこでは「体を動かしながら、学ぶ」。つまり自身の右手を挙げながら「meine rechte Hand」と発音したり、書いたりすることを叩き込まれました。「幼稚園児」のようだと言っていた参加者もいましたが、言語背景・様々な状況を理解し、言語を使用する、それが言語を学ぶ上で大事な点の一つだということをその研修を通して体験しました。余談ですが研修の終わりに、なぜかパリへの小旅行が組まれていたことも懐かしい思い出です。

「続けて参加していたら、いつの間にか、少しずつドイツ語で書き、話し、聞くことが億劫でなくなった」という声を聞くとうれしくなります。オンラインで行っていますので、時間を効率的に使えることも、当研究会のメリットです。これからも「ドイツ語入門研究会」を通して、ご参加の皆様と、楽しく「学び直し」、「学び合い」を続けて参りたいと考えております。

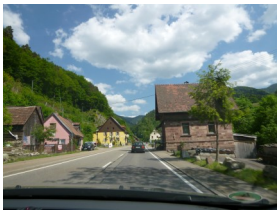
ドイツの街紹介

ドナウ川源泉の町、ドナウエッシンゲンとフライブルク、ホーエンツォレルン城

前々回のNo142号にて紹介済みのバーデン・バーデンから車で約1時間南下すると、フランス、スイスの国境に近い森と学術・文化都市のフライブルクに着きます。

Freiburg中心部

この町は、大学と大聖堂、等が有名で、路面電車が走り優雅な落ち着いた雰囲気の所ですが、訪問された方も多いかと思います。大聖堂に上り、旧市街や黒い森を一望し、大聖堂前の朝市を楽しみ、キルシュトルテのケーキでゆったりした時間を過ごせます。


FreiburgからDonaueschingenへ

さて、今回はこの町から、黒い森の山間の道を通り、東へ約1時間走ると行き着く、ドナウ川の源泉のある、ドナウエッシンゲンの町、他の思い出を紹介します。

Donaueschingenの宿泊ホテル前

人口2万人余り、権威ある音楽祭も開催される静かで自然の美しい町ですが、その中心に位置するフュルステンベルク候の居城内にあるドナウの泉（Donauquelle）が、諸説はあるものの、ドナウ川の源泉地とされています。

町の傍を流れる川

ドナウ川といえば、主にドイツを縦断しているライン川やエルベ川のような大河に比べ、ドイツ南西部から主に中欧・東欧、ウクライナまで10か国以上を流れる他国の国際河川のイメージをお持ちかと思います。しかし、ドナウ川も、黒海へ注ぐ全長約2,850Kmの内、この水源の町から約660Km余りはドイツ南部のウルムやレーゲンスブルク、パッサウを流れ、その後にオーストリア領内に入っています。母なるドナウの源泉はドイツのこの地なのです。

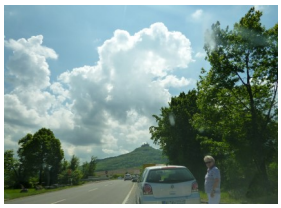
ドナウ川の源泉

後に分かったことですが、この町と交流の深い町が日本の山形県上山市にあり、「上山・ドナウエッシンゲン日独友好協会」として友好都市盟約を結び、1995年から民間交流が行われています。郷土出身の有名な歌人、斎藤茂吉が、留学先のウィーンでドナウ川に感銘を受けてドナウの源泉に興味を持ち、ミュンヘン大学に移った時に同市を訪問した縁で交流が始まったそうです。この町には、「斎藤茂吉の道」と命名された道が源泉近くにあり、歌碑も建立されています。

町の中心

音楽祭モニュメント

同市に滞在中にアウトバーンを北へ約60キロ走り、プロイセン王家発祥の地でドイツ屈指の名城とも言われている天空の城、ホーエンツォレルン城にも足を延ばしました。海抜855mの城からの眺めは勿論、王家の歴史的遺産の数々の展示物を見学し、中庭のテラスで休むと中世に戻った感じになれるところです。


道を誘導してくれたドイツ人

道に迷い駐車していると、現地の夫人から声をかられ、わざわざ山頂の城が見える場所まで車で誘導してもらい、感激のあまり思わず、Danke schoenを連発したことも忘れがたい思い出です。

Hohenzollern城の中庭

ドイツへ旅したいが現役で時間の取れない方々や、私も含めて、もうコロナ後のドイツの旅は厳しいかな、と思われている皆様にも、少しでもドイツ各地の町の魅力をお伝えしたく、拙稿ながら掲載を続けさせていただいています。

（常任理事: 志賀 久徳）

ドイツ語事始め

ドイツと私 – 関 昭雄

僕のドイツへの興味は父親の影響でした。父は東京中央区の区会議員で多分、戦前の軍国主義の名残だったのでしょうか、アメリカに占領されても、ドイツ好きを貫きました。そのせいか、中学3年の時にNHKの関口存男ドイツ語講座に出会い、その縁で1958年、後に妻となったHannelore と文通を始めました。もちろん、はじめはドイツ語ができず、英語でしたが、高校3年から高田馬場にあった高田外語で藤田五郎教授に教わり、大学受験もドイツ語で済ますことができ文通もドイツ語にチェンジ。

ドイツでの職業人生

職業もドイツがらみの会社ばかり：最初はアメリカの航空会社PAN AMERICANで勤務先は西ベルリンでした。当時はベルリンの政治的な状況でルフトハンザは飛んでいませんでした。10年間の勤務を思いおこせば、生涯で多分一番多感で楽しかった時期で、いろいろな方とお会いでき、欧州諸国はもちろん、南北アメリカへも飛んで数々の貴重な経験も積むことができました。その後、縁があってドイツの最大手の総合化学会社BASFの本社に1975年入社、Mannheim/Ludwigshafenで 約一年過ごし、その後、同社の日本法人に転勤、日本で始めて本格的に働き始めた次第です。

BASF時代 阿寒湖旅行

それからまた10年、今度は全く別な業界に転職、定年退職するまでBMWの日本法人にお世話になりました。担当は広報でこの時も仕事柄、各界のリーダーの方々と知り合うことができて、貴重な財産となりました。

BMW時代 アジア初の蒔絵技法の塗装車両

退職後もドイツ

その後もドイツとの関係は常に保たれ2006年の－日本におけるドイツ2005/2006には一年間、在日独商工会議所の広報マンとして在職、日本の代表的な新聞紙日経、読売、毎日の編集委員など一緒にドイツ各地の有名企業を訪問して、PRに勤めたのもいい思い出となりました。また2006年といえばFIFAのワールドサッカードイツ大会が開かれ、NHKの臨時職員としてFrankfurt、Nürnberg,Dortmund, München, Berlinでの実況アナウンサーとともに参加できたこともいい思い出です。残念ながら日本勢は早々に敗退してしまいましたが，NHKは全戦生中継だったので各地を回ることができました。

というわけで、ドイツとのつながりは中学生時代からめんめんと現在に至るまで続いて

いることになります。BASFやBMW時代も出張でドイツや欧州には年に４－５回出かけており、また本社からの電話やメールも当時はほとんどドイツ語で、日常性がありました。

映画「バルトの楽園」
Bruno Ganz氏
のアテンド

現在でもコロナの2年間は別にしても毎年数回ドイツ、特にベルリンとミュンヘンに滞在します。今年もすでに1月と3月に渡独しております。

趣味は外国の古銭収集

奥様とお墓参り

1967-8年ころオーストリアチロル地方に休暇、その時に妻から記念に1915年発行の4ダカット金貨（Franz Josef）とマリアテレジアの銀貨をもらい、その刻印のすばらしさに大変魅了され、自分の中の収集癖に火が付きました。すでに中学生のころからドイツの切手を収集、日本橋高島屋にあった切手商の常連客でしたので下地があったのでしょう。最初はドイツにいたため、地元ドイツの銀貨が中心でドイツ連邦時代のの1830年から、1871年ドイツ帝国、そののちのワイマール共和国、第三帝国と現代ドイツのコインでした。良い思い出は、60年代、ほんとにめずらしがられた東洋人が日本コインをもって交換会に参加したことで大変評判になり、東京から持参した日本の古銭が本当に飛ぶように売れ、自分の収集の大きな一助になったことは確かです。

日本で4体目の輸入
となるBerliner Buddy

ただ、当時のドイツでは勿論、地元ドイツコイン収集がメインで、財力的にも知識的にも自分のコレクションに特徴を持たせることができない、と感じ始め他のコインに目を向け始めました。歴史的に興味深くしかも欧州、日本とインドネシア（親友がいるため）を結びつける分野：それがオランダ東インド会社のコインだったのです。1602年に作られた同社は世界で初めての株式会社とされ17世紀のオランダに活況をもたらしました。いわゆるオランダ黄金の世紀です。その貿易の大部分の利益が日本との貿易でもたらされたものなのです。当初、金銀銅貨はオランダで作られ東インド（今のインドネシア）に送られアジアで広範に流通、その後はバタヴィア（現在のジャカルタ）でもコインは製造されました。なんと日本の小判や日本銅がそこで使われたのです。コイン収集に関しては面白い話がいっぱいありますので、機会がありましたら皆様にご披露したいと思っております。

新入会員紹介（田中 重伸）

私は令和3年末まで陸上自衛官でした（現役最後の写真です）。少年時代の私は、陸軍将校としてドイツに行くことを夢見ていました。独学でドイツ語を勉強し、防衛大学校を経て幹部自衛官に。2000年からは念願のドイツ連邦軍Bundeswehrに留学し、数十か国の将校らと学ぶ機会を得ました。若い頃は航空操縦士として北海道を飛び回っていましたが、防衛省勤務が比較的長く官僚同様の仕事もしていました。全国を転任し、最後は、師団長や陸上自衛隊教育訓練研究本部長を務めて退官し、 今は、家内と二人で小さな宿屋を営みつつ、かつて研修勤務していた商社に顧問として復帰し、多様な人生を過ごしています。ドイツ大使館とは、武官室を通じてずっと交流があり、今でもGeneralと呼ばれています。35年ぶりに故郷の千葉県に戻りましたので千葉県日独協会に入会させていただきました。

宗宮好和名誉会長を囲んで

2019年に開催されました当協会名誉会長宗宮好和先生の「『エーリッヒ・カウルの日記』を翻訳する会」ですが、6月18日に津田沼の小料理屋「菜」で参加メンバーによる打ち上げが行われました。2020年3月開催の予定がコロナのため延期に。やっと実現、先生と6名のメンバー（1名は残念ながらご欠席）の参加となりました。約4年ぶりに先生へ感謝の気持ちを直接お伝えし、勉強会の充実した日々を思い返すことができました。

また宗宮先生からは、先生のご友人で東大名誉教授の新田春夫氏が、習志野市教育委員会の承認のもと、『カウルの日記』の原文を言語史の観点から研究、100年前の低地ドイツ語の特徴とカウル固有の表現等について論文を発表され、その論文がドイツの専門誌に掲載されたとのご報告がありました。

『エーリッヒ・カウルの日記』（習志野俘虜収容所にいた水兵が綴った日記）の翻訳は協会HPからご覧いただけます。『祖父ユリウスの体験1913-1920』の翻訳と併せて是非ご覧ください。

(常任理事: 本橋 緑)

今後の予定

■ドイツ語入門研究会（オンライン形式）

9月5日から週2回（火・木）、1回 40分程度 (19:30-20:10)

ナヴィゲーター： 木戸芳子（当協会理事、前東京音楽大学教授、元早稲田大学・日本女子大学非常勤講師、元独検出題委員）

●詳細は、同封案内書をご参照ください

■青壮年部 日本語シュタムティッシュ

日時： 9月24日 18:00-19:00 JST
11:00-12:00 MEZ

講師： 室田 真由見（当協会理事）

■2023年度ドイツ語講習会（オンライン形式）

今秋10月から開催、土曜日夜、7回

講師: 岡村 三郎先生（当協会理事・早稲田大学名誉教授）

参加費： 会員￥3,500、一般 ￥4,000、学生¥2,000

●詳細は、協会HP、メールにて別途ご案内いたします

会員情報

法人会員 **医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人清和会、（株）京葉ビル管理、（株）和幸電気工事**

編集後記

今月号の編集を通じて、活動は、コロナ以前の活動に戻っている実感を得ます。キーゼヴェッター大佐の送別会は、他の予定と重なり参加できませんでしたが、出席者のレポートと写真で充分、そのあたたかい充実した会であることがわかります。また、会員人財の経験、専門性を今月号において木戸理事、関会員の寄稿からもダイレクトに感じることができます。新しい会員の入会は、今後の組織運営に必須ですが、現在の会員の知見をより多くの機会で会員相互で共有できる場も必要と思いました。来年以降、組織設立30周年の検討も視野に入りますが、今一度、協会組織の中期計画の策定が必要ではと考えました。（勝見）